広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第55号　2006　233－240

一致理論に基づく日本語形容詞の敬語化に関する考察

イヴァナ・アドリアン

（2006年10月５日受理）

Considerations on Honourification of Adjectives in Japanese Based on Agreement Theory

Adrian Ivana

The aim of this paper is to extend the application of a previous analysis of simple honourific expressions to modifier expressions including honourified adjectives. The morphological differences between honourific verbal predicates and adjectival predicates, and the identification of the target of honourification are examined. The author has proposed in previous papers an analysis of Japanese honourific constructions, based on the theories of light verbs and agreement. That proposal was made on the basis of expressions including honourified verbs and nouns. The previously proposed analysis is applied in conjunction with a structure of the adjective modifier construction similar to the relative clause structure.

Key words: Japanese, honourific, modifier, agreement, adjective
キーワード：日本語，敬語，修飾，一致，形容詞

０．本稿の位置づけ

敬語表現をめぐるこれまでの研究の対象は，いわゆる尊敬語，謙譲語，丁寧語を中心とした，動詞の敬語化に限定される傾向が強かった（Harada, 1976；久野，1989；Toribio，1990等）。名詞や形容詞の敬語化，なかでも次のような形容詞の敬語化に対する検討は，まだほとんどなされていない。

例１　先生はお優しい／先生はお優しかった。
例２　お優しい先生／お優しかった先生

しかし，このような形容詞の敬語化には，動詞の敬語化とは異なる特性が様々に観察できる。そこで本稿では，筆者がこれまでに主張して来た動詞の敬語化（Ivana & Sakai, to appear）及び名詞の敬語化（Ivana & Sakai, 2006）の研究を踏まえて，例１，例２のような形容詞の敬語化現象について考察する。

これらの表現をめぐる問題として，形態的な問題点と統語的な問題点が挙げられる。

形態的な面では，敬語化されない通常の形容詞と動詞の時制活用が対応しているが，敬語化されると，相違が生じる。

例３　やさしい　　↔　帰る
例４　やさしかった　↔　帰った
例５　おやさしい　　↔＊お帰る／お帰りになる
例６　おやさしかった↔＊お帰った／お帰りになった

言い換えると，例５・例６のような表現では「お」が時制を持った形容詞に直接付加されているが，時制を持った動詞活用形にはつけられない。即ち，動詞の敬語化の場合は「お」は動詞の連用形に付加され,「する・なる」というもう一つの構成素が必要である。動詞の敬語化と形容詞の敬語化の間にはなぜこのような相違があるのであろうか。

従来の分析の中では Suzuki（1989）だけが形容詞

本論文は課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：水町伊佐男（主任指導教員），町　博光，江端義夫，酒井　弘

の敬語化について論じているが，このような時制活用の問題については述べられていない。

統語的な面では，多くの研究（Toribio, 1990; Boeckx & Niinuma, 2004）が尊敬の対象となる名詞句が「お」と一致関係にあるということを認めている。一致自体については主に二つの考え方がある。一つは主要部指定部一致（Spec-Head Agreement）で，もう一つはChomsky（2000）のAGREE理論であるが，それぞれ図１，図２のように尊敬の対象が「お」を含む構成素の指定部，または補部に現れるとされる。

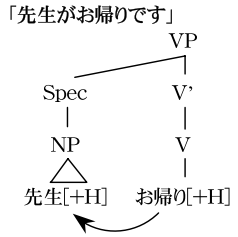

図１　主要部指定部一致

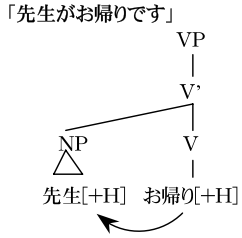

図２　Agree理論による一致

図１，図２では矢印の方向は尊敬の対象を表す。

どちらの理論でも動詞にある［+H］素性が名詞にある［+H］素性と対になる。このことを一致と呼ぶ。

この二つの理論の違いは，主要部指定部一致の場合，名詞が動詞の指定部にあるのに対して，Chomskyの理論では名詞が動詞の構成素統御（c-command）領域にあるということである。そうすると，Chomskyの理論の場合，構成素の移動を仮定する必要がなくなり，分析がより経済的になる。

まとめると，どの一致理論でも「お」を含む構成素が主要部として，指定部もしくは補部の一部である尊敬対象となる名詞句の右側に位置する。

しかし，図３からわかるように，単純なように思われる修飾構造では「お」を含む構成素が修飾要素の一部として左側に現れ，尊敬の対象が主要部として右側に位置する。

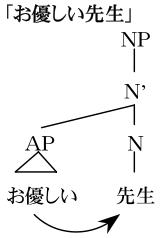

図３　修飾構造における一致

以上のことをまとめると，動詞述語の場合尊敬の対象は述語に付加されるのに対して，形容詞の場合に限って尊敬の対象が主要部であるように見える。このことはなぜ起こるのか問題である。

これまでにこのような問題を取り上げた先行研究は，管見の限り，一つもない。

これらの疑問点を明らかにするため，本稿ではまず日本語の修飾構造自体に対してこれまでにどのような分析がなされているかを考察したうえで，形容詞を含む敬語表現の分析を提案する。この分析はIvana & Sakai（2005, 2006）に基づき，名詞と動詞について提案した分析の発展とする。

本稿の構成は下記の通りである。

第１節ではこれまでの筆者の研究で敬語表現について提案した分析を紹介する。

第２節では形容詞修飾構造の分析を考察する。

第３節では尊敬形容詞修飾表現の分析を提案し，上記の問題点を検討する。

１．動詞の敬語化の分析

Ivana and Sakai（to appear）では，主に動詞の敬語化について論じた。すなわち，「お～になる・する」構文の「する・なる」動詞を扱った。

「お～」を含む表現の分析では次の結果が得られた。

「お」と尊敬の意味の分布や尊敬対象との位置関係から考えると「お」は機能範疇で，意味的に敬意を表す。

形式的に，Chomsky（2000）に基づき，一致理論を利用して敬意の対象を同定する。

Chomskyの理論では一つの構成素Ｘ（たとえば動詞）は別の構成素Ｙ（たとえば名詞）と似たような素性（たとえば複数）を持つと，この二つの構成素が対になり，一致する。この一致によって文中の統語的関係が確認され，自然な表現が成り立つ。

同様に，「お」は［+H］という抽象的な素性を持つ。この素性が尊敬の対象にある［+h］という語彙的な素性と一致することによって，尊敬の対象が同定され，表現全体の尊敬の解釈が成り立つ。呼びかけ辞と尊敬

の程度の分布から考えると，尊敬の対象にある［+h］素性はその名詞自体が持つものではなく，実際には呼びかけ辞によって人間を表す名詞に加えられる。この呼びかけ辞を「軽名詞」と呼ぶ。

「お～する・になる」のような敬語表現での「する・なる」は Grimshaw & Mester（1988）が提案した軽動詞で，直接に敬意の意味にかかわっていない。つまり，下記の例７，例８の「なる・する」は例例９，例10の「なる・する」と同様なものである。

例７　先生がお帰りになった。
例８　我々は先生をお助けした。
例９　会議が延長になった。
例10　議長が会議を延長した。

しかし，「する」と「なる」の特徴の違いによって，いわゆる「主語尊敬」と「目的語尊敬」の違いが生じる。

Grimshaw & Mester によると，「宿題をする」のような表現では本動詞「する」は〈動作主〉と〈対象〉という二つの意味役割を与えることができる。これに対して「延長する」などの軽動詞「する」は一つの意味役割しか与えられない。さらに，軽動詞「する」が語彙的意味を失っているため，元の意味役割は付与されない。しかし，意味役割を与えなければならないため，その中身を漢語動名詞から「する」に転移し，「する」は漢語動名詞から与えられた意味役割を元に，主語に意味役割を与える。

Ivana & Sakai（to appear）では，敬語の「する」と「なる」は両方軽動詞であるが，「する」と違って「なる」が意味役割を与えることができないと考えた。一方，自然な文が成立するためにはその文に利用されている動詞の意味役割を全て付与されなければならないとされる。そうすると，目的語尊敬構文では主語が「する」から意味役割をもらうことになる。「お」の構成素統御領域から取り出しているということである。従って，図４のように，尊敬の対象になることができない。

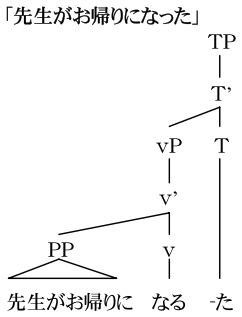

図４　主語尊敬構文の構造

これに対して，主語尊敬構文では主語が「なる」からではなく，名詞化された本動詞から意味役割をもらう。つまり，主語は本動詞の形成する動詞句の構成素である。そうするため，「お」の構成素統御領域に入り，図５のように，尊敬の対象になる。

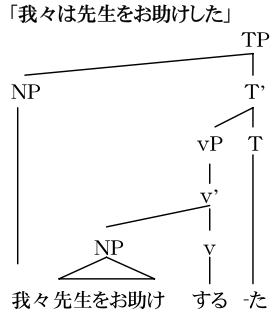

図５　目的語尊敬構文の構造

２．名詞の敬語化の分析について

以上の結果を受けて，Ivana and Sakai（2006）では主に名詞句の敬語化について論じる。「する・なる」が直接敬語化に参加しないのであれば，図５の「先生をお助け」のような名詞化された構成素や本名詞が「お」の存在によって敬語かされるという仮説から分析を進めた。

図６では呼びかけ辞が軽名詞という機能範疇である。この軽名詞は人間を表す名詞を選択し，その名詞に［+h］,［-h］,［Øh］の何れかの語彙的素性を加える。

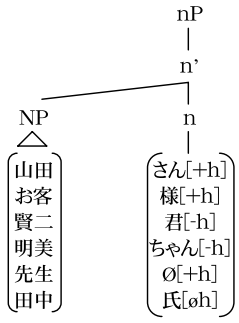

図６　軽名詞の構造

図７では「お」がこの軽名詞と一致しようとしている。軽名詞だけが［h］素性を持つため，「お」は通常の名詞などに対しては反応しない。そして，軽名詞は［+h］タイプであれば（即ち，その軽名詞が表す人物が尊敬すべきであれば）尊敬一致が成立し，自然

な表現がとなる。軽名詞が［-h］或いは［Øh］タイプであれば一致が成立せず，不自然な表現が生じる。

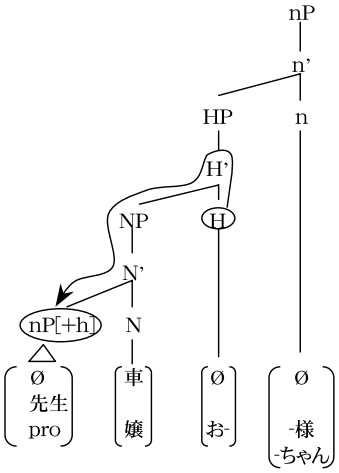

図７　日本語の名詞句の構造

図７では「お」が自体の構成素統御領域にある軽名詞（一番左側にある nP）と一致しようとしている。nP は［+h］素性を持っているため，一致は成立する。この nP と「お」の間にある NP は軽名詞でないため，無視される。

尚，右側にある nP は，この図に描かれていないが，より上位の構造に「お」が表れれば，それと一致する。

ここで「お」が実際の発話の語順のように「車」の前ではなく，その後ろにあると考えている。「お」は主要部であるため，日本語の全ての主要部と同様に構造上では補部の右側にある。そこで，発話される順番は音声レベルで調整されると考えている。図12に見られるようにこの順番の調整は英語の時制の配置などでも起こることがある（Lasnik, 1999）。

この考え方によって，「先生のお車」のような名詞のみを含む敬語表現と「先生がお帰りになった」のような敬語文が統一的に説明できる。つまり，敬意が「お」と「先生」の一致によって生じるため，これら以外の要素は敬意の意味に直接的にはかかわらない。従って，動詞が存在しなくても，または完全な文でなくても敬意の意味が成り立つ。以下ではこの考え方を用いて，形容詞を含む敬語表現の分析を試みる。

３．形容詞による修飾構造の考察

英語などでは修飾構造が図８のようなものだと考えられている。つまり，形容詞は修飾される名詞に対して付加されている。

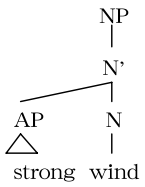

図８　英語の修飾構造

同様の構造を日本語の修飾構造に適用すると，図９または図10のようになる。

英語の修飾構造を日本語に適用すると，構造が図９のようになる。

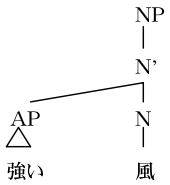

図９　日本語の修飾構造（仮）

同じ単純な構造を敬語化形容詞に適用すれば，図10のような構造になる。

しかし，日本語の場合，「優しかった先生」のように，形容詞が時制をとるため，図９の構造では不充分である。時制も構造に反映されなければならないため，日本語の修飾構造は図11のように，少なくとも時制の投射を含む。この構造は時制も含む述語が名詞を修飾するという点で関係節構造とよく似たものである。

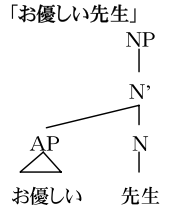

図10　修飾構造（時制を持たない場合）

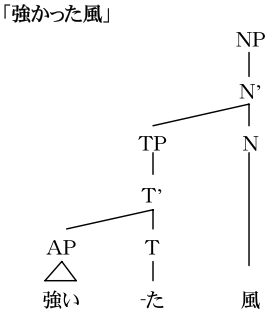

図11　修飾構造（時制を持つ場合）

英語でも修飾構造に時制を加えることができる。そうすると修飾構造は図12のような関係節構造になる。

したがって，日本語でも修飾構造は関係節構造であると考えられる。

日本語では図９のような構造が不充分ではあるが，このような構造の存在を否定する直接の証拠はない。しかし，関係節の構造で全ての修飾に関する現象が説明できるので，その他の構造を仮定する必要がないと思われる。

まとめると，英語では図８と図12のように修飾構造には二つのタイプがあると考えられるが，日本語では修飾構造として関係節が利用されるといえる。

そうすると，日本語の形容詞は実際に動詞に近いのではないかという疑問が生じるが，Baker（2003）はイ形容詞が時制を取る以外，英語の形容詞と同じ振る舞いを見せていると指摘している（即ち，動詞と違うものである）。さらに，Baker によると，欧米言語と違って，日本語では形容詞がϕ素性（性，数）を持たないため，名詞に直接付加できない。そうすると，日本語では形容詞が関係節構造のみで名詞を修飾することができる。したがって，関係節修飾構造は図13のようになる。

Nishiyama（1999）も図13と似たような構造を提案しているが，vP の下に PrP（Predication「述語」）という構成素を提案して，修飾された名詞はその指定部に属する。つまり，Nishiyama は PrP 構成素を用いて修飾表現の文に似た構造を説明しようとしているのである。しかし，Baker の主張が正しければ，PrP 構成素を仮定しなくても分析が可能になる。

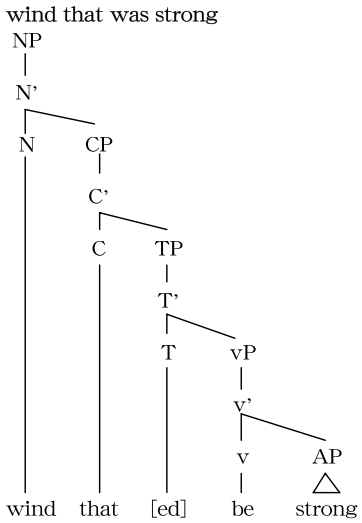

図12　英語の関係節構造

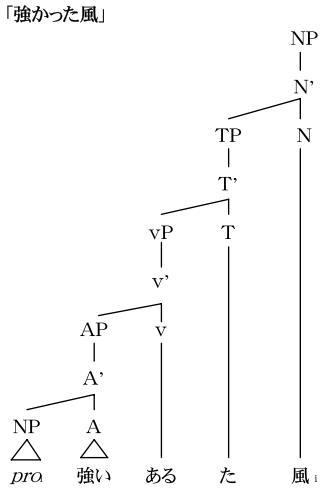

図13　日本語の関係節構造

この構造では修飾される名詞は関係節の主語となる *pro* と同じ物を指している。さらに，Nishiyama によると，「ある」はダミー連結詞（コピュラ）で，時制を担うものである。

この構造はいわゆる「イ形容詞」の構造として充分であるが，例11のように，「ナ形容詞」が使用されるの場合に，なぜ「だ」連結詞が存在するのかを説明することができない。

例11　穏やかだった風

イ形容詞とナ形容詞を一つの構造で分析するには，図14のような構造が考えられる。

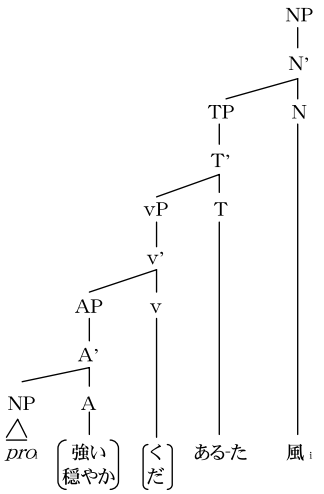

図14　日本語の修飾構造

この構造では「ある」は時制とともにTに生じる。このような位置に助動詞が現れることは，英語のdo support現象や日本語の「は・さえ」挿入構文で見られる。例えば，以下の例12では本動詞，軽動詞，ダミー動詞が三つとも存在するが，構造的に本動詞，軽動詞と時制投射しかないため，ダミー動詞「する」はT投射に属すると考えられる。

例12　昨日［［［［先生がお帰り$_{HP}$］に$_{PP}$］なり$_{vP}$］さえしなかった$_{TP}$］。

さらに，「だ」または「く」は連結詞で，軽動詞として生じる。この構造の一つの利点として，「です」を含む例13のような丁寧名詞述語構文と例14のような丁寧形容詞述語構文にも適用できるということである。

例13　私は学生です。
例14　先生がお優しいです。

まとめると，Bakerに従って日本語では形容詞が名詞を修飾すると，ϕ素性がないため関係節構造をとらなければならないと考えられる。この節を構成するため，形容詞は連結詞や時制を担うダミー連結詞を取らなければならない。関係節によって修飾された名詞は動詞を述語に持つ普通の関係節と同様に，関係節の主語である*pro*と同じ物を指す。

4．形容詞の敬語化を含む構造の考察

第1節の考え方を踏まえると，例14の構造は図15のようになる。

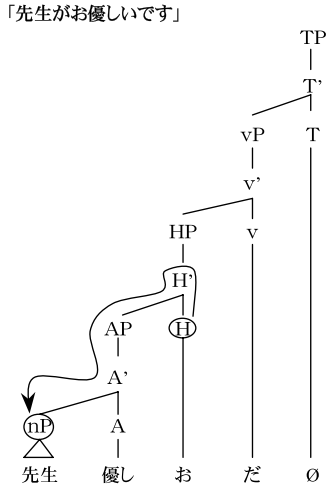

図15　敬語丁寧形容詞述語構文の構造

Suzuki（1988）は「お」が［+N］素性を持つ名詞と形容詞のみにつくと指摘している。すなわち，動詞など，［-N］素性を持つ要素につかないということになる。従って，連結詞は動詞の一種であるから［-N］素性を持ち「お」がつくことができない。そうすると時制は「お」の上位にあるということになる。「お」が形容詞に直接加わり，尊敬の対象となる「先生」と一致する。このように考えると，「です」を含まない「先生がお優しい」のような表現と「先生がお優しいです」のような表現の構造的の相違はvPの有無だということになる。つまり，構造がほとんど同じで，新しい構造を考えることが必要なく，統一的な分析ができる。

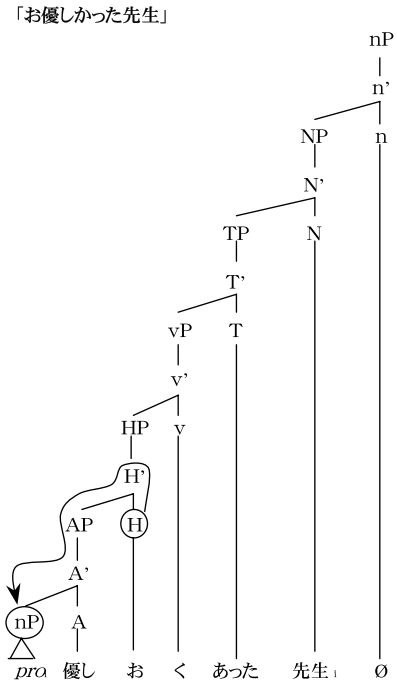

図16　敬語形容詞関係節の構造（イ形容詞の場合）

次に，この構造から派生すると考えられる関係節構造は図16のようになる。この構造でも「お」は直接形容詞に加わり，その下の*pro*と一致する。この*pro*は上位の「先生」と同じ人物を表しているため，［+h］素性を持ち，「お」との一致が成立し，表現は自然となる。

ここで重要な点は，関係節中の時制Tが「お」の上位にあるということである。そうすることによって，本稿の最初に述べた形態的な問題点が解決できる。即ち，「お」が時制を持った形容詞に加わるのではなく，時制が「お＋形容詞＋連結詞」に加わるということで

ある。この構造は「お～する」構文とよく似ている。つまり，「お～する」の構造は「お＋連用形動詞＋軽動詞」で，それに時制が加わる。この考え方では，形容詞に連用形によって名詞化された動詞，連結詞に軽動詞「する」が対応する。

さらに，図16の構造を考えることで最初に述べた統語的な疑問点も解決できる。つまり，日本語の修飾構造が英語と違って，関係節のみであると考えると，「お」の一致の対象は上位にある修飾された名詞ではなく，関係節の主語である *pro* である。この *pro* は関係節の主語であるため，修飾された名詞と同じ人物を表す。敬語の場合，これは尊敬すべき人物であるため，「お」との一致が成立する。

以上の議論ではいわゆる「イ形容詞」の例を利用したが，図16の構造は「ナ形容詞」にも適用できる。図17でみられるように，「お静かだったお嬢様」のような表現では連結詞「だ」は軽動詞 v に属すると考えると，ナ形容詞の修飾構造はイ形容詞の修飾構造と同じになる。

「お静かだったお嬢様」

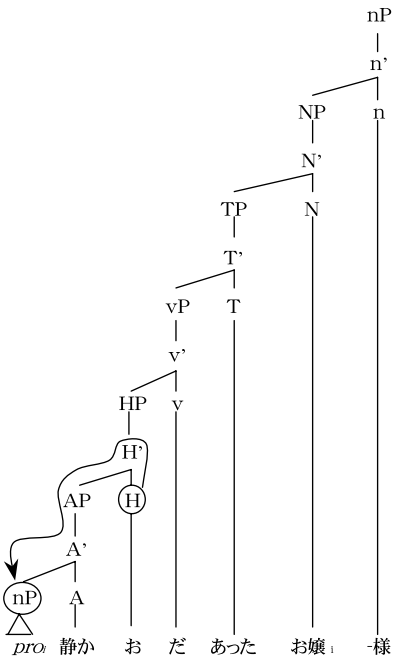

図17　敬語形容詞関係節構造
（ナ形容詞の場合）

5．まとめ

本稿では日本語の修飾構造を考察し，一致理論に基づいて形容詞の敬語化に関する問題点を検討した。

「する・なる」の必要性については次のように考えられる。形容詞述語の場合，「お」が形容詞に直接加わることができるのに対して，動詞の場合，「お」が名詞化された動詞に加わることしかできない。そのため，尊敬形容詞述語は直接時制を担うことができるが，動詞の場合は時制を担う「する・なる」という二つの軽動詞が必要である。

統語構造に関しては，次のように言える。形容詞修飾構造について修飾された尊敬すべき構成素，即ち主名詞は確かに「お」の上位にあるが，実際にはその修飾された構成素自体ではなく，それと同じものをさす別の構成素，即ち *pro* が「お」の尊敬対象になる。尊敬の対象は「お」の構成素統御領域にあるということは動詞の分析と同様のため，形容詞修飾表現の分析を筆者が提案した名詞句や文の分析と統一的に説明できると思われる。

結果として，これまでに筆者が名詞表現や敬語文に関して提案した分析が敬語修飾表現に適用でき，全ての敬語表現を統一的に分析することに近づくことができたと思われる。

さらに，この分析は Baker の理論の間接的証拠とも考えられるため，敬語表現だけでなく，日本語の名詞句の構造に関する議論発展させることができると考えられる。

【参考文献】

Baker, Mark C., 2003, Verbal adjectives as Adjectives without Phi-Features, *The Proceedings of the Fourth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, Otsu Yukio ed., Hituzi Syobo, Tokyo, pp.1–22.

Boeckx, Cedric and Niinuma Fumikazu, 2004, Conditions on Agreement in Japanese, *Natural Language and Linguistic Theory*, vol 22, pp.453–480.

Chomsky, Noam, 2000, Minimalist Inquiries: The Framework, in *Step by Step*, R. Martin, D. Michaels, and J. Uriagereka eds., MIT Press, Cambridge, MA, pp.89–151.

イヴァナ・アドリアン，酒井弘，2003，「敬語文の構造と軽動詞」，『第127回大会日本言語学会予稿集』，62～67頁。

Grimshaw, Jane and Mester, Armin, 1988, Light Verbs and Theta Marking, *Linguistic Inquiry*, Volume 19,

Number 2, pp.205–232.

Ivana, Adrian and Sakai Hiromu, to appear, Honorification and Light Verbs in Japanese, Journal of East Asian Linguistics.

Ivana, Adrian and Sakai Hiromu, 2006, Honourification in the Nominal Domain in Japanese: An Agreement Based Analysis, Manuscript, Hiroshima University.

Lasnik, Howard, 1999, Verbal Morphology: Syntactic Structure Meets the Minimalist program, in *Minimalist Analysis*, Blackwell, pp.99–119.

Nishiyama Kunio, 1999, Adjectives and the Copulas in Japanese, *Journal of East Asian Linguistics*, vol 8, issue 3, pp.183–222.

Suzuki Tatsuya, 1989. A Syntactic Analysis of an Honourific Construction o … -ni naru, *The Proceedings of the 8th West Coast Conference on Formal Linguistics*, Jane Fee and Katherine Hunt eds., Stanford Linguistics Association, CSLI, Leland Stanford University, pp.373–383.

Toribio, Almeida Jacqueline, 1990, Specifier-Head Agreement in Japanese, *The Proceedings of the 9th West Coast Conference on Formal Linguistics*, Aaron L. Halpern ed., published for the Stanford Linguistics Association by the Center for the Study of Language and Information, Leland Stanford Jr University, pp.535–548.